

やって援助の場に生かすのか。木村さん、富田さん、出羽さんらは、それを教えてくれる生の教材である。毎日見学の日程が終了すると、夕刻から夜にかけて、有志が木村さんや富田さんを囲んで酒を飲みながらいろいろなことを語り合った。結局毎晩宴会に終始してしまった感があるが、現地でがんばる日本人と本音で語り合うという点では所期の目的を果たせたのではないかと思っている。

最後に、この場を借りて、フィールドスクールの実施にあたりお世話になった Link の木村茂さん、富田千草さん、アーサー・パッターナー・デック財団の出羽明子さん、

チェンマイ大学社会学部のクワンチーワン・ブアデー先生にお礼を申し上げたい。また今回のフィールドスクールは、改革プログラム代表の竹田晋也先生および改革プログラム事務局の落合知子さん、小川裕子さんその他の方々の協力なくして実現し得なかった。あわせてお礼を申し上げたい。

引用文献

木村 茂. 2007. 「森と生きる人々に学んで—北タイの村おこし試行錯誤」加藤剛編『国境を越えた村おこし—日本と東南アジアをつなぐ』NTT 出版, pp. 135-163.

トルコの神秘主義教団を訪ねて

—あるムスリムたちの宗教実践—

西山 愛実*

ここは、トルコのイスタンブールにある古い建物の一室。その中では、100 人を優に超える男性たちが腕を組み、輪になって周っている。輪の中心には、裾の長い白いワンピースのような服を着てくるくると旋回する若い男性、そして同じく長い、しかし黒い衣を身にまとい、体を上下に動かしながら、何やら呪文のようなものを唱え、皆を先導する初老の男性がいる。部屋の隅には、太鼓やタンバリ

ンのような楽器でリズムを取る者が数名並ぶ。20 畳程のその部屋には人があふれ、外はもう肌寒いというのに、部屋は熱気に包まれている。その半階ばかり上部に位置する女性専用の屋根裏部屋にまで、熱い空気と、加えて汗の匂いが漂ってくる。それともその熱気は、私の隣で、首や手を激しく振り回している若い女性から湧き立っているのであらうか…。

* 京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科

トルコは、西にギリシアとブルガリア，東にイランやアルメニアを隣国とする，アジアとヨーロッパの境に位置する国である。共和国建国（1923年）初期，後に「アタテュルク（トルコの父）」という姓を与えられるようになるムスタファ・ケマルによって，数々の「世俗化・政教分離」政策がとられた。それらの政策により，「反近代」の象徴として禁止の対象となったもののひとつが，今回取り上げる「タリーカ」である。

タリーカとは元来，「道」を意味するアラビア語である。そこから，信仰の内面を重視するイスラームの神秘主義の思想・運動（タサウフ）においては「神へ至る道」，転じて，「神と合一するための修業方法」，そして，修業を行なう人々が集まる「集団」の3種類の意味を有する。本稿で取り上げるのは3番目の，神秘主義の教団を意味するタリーカである。

さて，トルコでは1925年の法律によりその結成・活動が禁止されているはずのタリーカであるが，彼らが逮捕されるおそれはないのだろうか？ …どうやら心配は無さそうだ。夜の10時過ぎに，近所中に響きわたるほどの盛大な音を出しているところからして，秘密警察や軍部の人間が入ってくることはないのだろう。

1925年の法律制定以来，現在に至るまで禁止されているタリーカであるが，このように，実際には数々の教団が存在し，活動を行なっている。トルコでは1945年の複数政党制導入に始まり，イスラーム派政権成立などの折に触れ，政治，社会全体においてイス

ラームの実践が顕在化してきた。法律の施行直後は政府による激しい弾圧を受けていたタリーカも，政党や企業，文化保護，教育活動と結び付き，次第に社会の表に出てくるようになった。彼らの存在はトルコにとって，いわば，「公然の秘密」となっているというのが現状である。

このタリーカ（Z教団とする）も，「伝統音楽」の擁護者として，政府によるお墨付きのもと，冒頭に挙げた修行活動を行なっている。この修行は，ズィキルと呼ばれる。ズィキルとは「想起」を意味し，タリーカにおいては，神の名や祈祷の句を唱える修行の意味で使用される。黒い長衣の男性をはじめ，皆が声を揃えて発していたのは，神を称える言葉だったのだ。熱気と興奮に包まれたZ教団のズィキルに参加しながら，私の脳裏には2年前の日々が蘇っていた。

P教団との出会い

筆者が初めてトルコを訪れたのは，上述したような，複雑な状況にあるトルコのタリーカを「この目で見てみたい」という興味からであった。そして，当時，所属していた学部 of 交換留学生として，トルコの首都アンカラに赴くことになった。トルコに着いてからしばらくは，大学生や先生，友人の家族，寮の警備員，果てはナンパ目的の若者・老人などさまざまな人に，「もしご存知でしたら，タリーカを紹介してくれませんか？」と尋ね歩いていた。尋ねるのを止めたのはいつ頃だったろうか。理由は，あまりにも相手の反応が悪く，期待外れなものだったからである。省庁

が立ち並び、いたる所でアタテュルクの垂れ幕や肖像が目につく第二の都市、アンカラでは、大きく分けて以下2種類の回答を得ることができた。ひとつは、タリーカに関し言及を避けるもの―「(一瞬の沈黙) タリーカの元々の意味は道というんだ。ルーミー(13世紀の著名な神秘主義詩人)の神秘詩を読みなさい、あれは素晴らしい」、「それよりもクルアーンを読むのが先よ」もうひとつは、タリーカを批判するタイプのもの―「そんなところに行ったら洗脳されるよ!」、「70代のやめと結婚させられるから、止めた方がいい」、「(周りの友人に向かって) ちょっと聞いてよ、この子、タリーカに興味があるんだって!」等々。滞在を始めてから2、3ヵ月経ち、私があれほどまでに見ることを望んだタリーカは、決して少なくない人たちにとって偏見や嘲笑の対象であり、現在でも社会のタブーとなっていることが徐々にわかってきた。

説教をされるか、からかわれるか、タリーカとのつながりを得られないまま時は過ぎ、紹介をお願いするのにも飽きていた頃、ある知人から声をかけられた。彼女の祖父母がタリーカに通っており、私に見せてくれるよう2人に頼んでくれたらしい。彼らは私を快く受け入れてくれ、こうして初めてタリーカに参加できることになった。

修業の集会―神への感謝とチャイの時間

タリーカに参加するまでの過程で、私はタリーカに対し、渡航前とは異なる思いを抱くようになっていた。「それほどまでにおかし

な組織なのだろうか」、「どんな怪しげなことが行なわれているのだろうか」…。このような気持ちを抱いたまま、知人の祖母に連れられて訪れたタリーカでの体験は、筆者のこのような疑問をいろいろな意味で裏切ることとなった。

本タリーカ(P教団とする)は教団付属のワクフ(寄進財団)により、食事提供などの慈善活動、書物やシャイフ(教団長)の説教を撮ったDVDの出版・配布等を行なっているが、一般の参加者(教団員とする)にとって最も身近な活動は、週に1度のズィキル修行のための集会である。教団員たちの言葉を借りれば、ズィキルは「万物の創造主である神へ、感謝を表す行為」であり、この実践のためにP教団に参加していると話す人が多かった。P教団では、この集会は男女別に行なわれ、断食月など特別なときでない限り、教団員それぞれの自宅で開かれる。私が参加したB地区の女性の集会は、男性が礼拝のためにモスクへ行く金曜の昼過ぎに行なわれていた。B地区の女性の集会の参加者の平均年齢は60歳前後で、人数は5～13名ほどであった。

ズィキルは音楽のようなリズムに合わせて行なわれる。始めはゆったりとしたテンポで、徐々に激しく、最後は緩やかに終わる。教団員たちは輪になって坐り(彼女たちは腰が悪いため坐りながら行なうのであって、男性のズィキルは立った状態で行なわれるという)、神を讃える言葉や神の美称を唱えながら、リズムに合わせて首や上半身を上下左右に動かす。観光客も訪れるメヴレヴィー教団

などのズィキルやインターネットサイトの動画で見られるような、皆が同じ動作をする「整った」ものではなく、本 B 地区の女性の集会では、ズィキル時の所作はばらばらであった。シャイでおしとやかな Eさんは声も動作も小さく、元気で強気な Mさんは叫ぶような大声を出しダイナミックな動きをする、というように、身振りや発声にそれぞれの性格が出ているのも興味深い。いわゆるトランス状態になる人はいなかったが、周りの呼びかけに気がつかないほど熱中する人もいる。反対に、仕切り役が不在だったり、声の調子が悪かったりする日は盛り上がり欠缺、ズィキルの間にあくびをする人、居眠りをする人もいた。私も、ズィキルをしていて気持ちが良くなるときもあれば、寝てしまうときもあり、「のれる」かどうかは、その場の雰囲気によって左右された。

ズィキルの雰囲気は、開始前の雑談時とは異なり神妙なものになるが、携帯電話で通話する者が出るように（「もしもし、いまズィキルの最中だから、後にしてくれない？」）、張りつめた空気の中で行なわれていると言い難い。40 分から 1 時間ほど続くズィキルの後は、ソファに坐りなおして皆で雑談するのが常であった。男性の集会ではズィキル終了後はチャイ（紅茶）が振る舞われるが、女性たちの場合ではシャイフの通達によってこの行為は禁止されている。「神聖なズィキル修行」の後に、その会場が「井戸端会議」と化すことを防ぐためである。とはいえ、家の主は通常、チョコレートや飴などの菓子類を配り、来訪者をもてなす。特に、客人に対

し食べ物を振る舞うという行為は、トルコ社会全体において美德とされるため、彼女たちはここで、慣習と師弟関係の「せめぎ合い」を体験することになる。甘いお菓子は、彼女たちにとってその妥協点なのだ。振舞いに対しては、すぐに手を伸ばす人もいれば、一度は必ず断る人もいる。しかしながら、結局は主のすしめを断れずに、その場にいる全員がチャイの代わりに小さなお菓子をつまみ、おしゃべりに興じていた。ときにはパンや料理、明白な禁止の対象であるチャイが出されることもあった。遠方の家で集会が行なわれた場合はその割合は高くなり、普段は難色を示す人も、「掟破り」となるこの行為を黙認し、おいしそうにチャイやお菓子をいただく。

タリーカをめぐる衝突

気がつけば、目の前の Z 教団のズィキルは終わりを迎えているようである。先ほどとは打って変わった静寂した空気の中、参加者は各自、一心に祈りを捧げている。祈りが終われば、ズィキルは終了である。P 教団 B 地区では体験したことのなかった、迫力のあるズィキルの余韻に浸っているうちに、周りにいた女性たちはそれぞれに解散し、別室に移動する人たちもいる。にぎやかな声が聞こえてくるところからすると、Z 教団の女性たちも、ズィキルの後のおしゃべりは欠かさないようだ。ただし、P 教団 B 地区と違い、参加者には若い人も多く、遅い時間帯にもかかわらずひとりで来ている女性、また外国人観光客の姿もある。欧米からの訪問客が多いの

か、通訳係と思しき女性が流暢な英語で受け答えをしている。外国人の訪問は私が初めてだったろう P 教団では見られなかったこの光景に感心し、話に聞き耳を立てていると、隣で陶酔していたあの女性に呼びとめられた。お茶のお誘いかしら、といういやしい予想ははずれ、ズィキルの後にシャイフの講話があることを教えてもらう。いわれてみれば、数は減ったものの、その場に残った数名の女性たちが、壁に設置されてある薄型テレビの前に陣取っている。画面に移ったシャイフは、先ほど、黒い長衣をまとい、輪の中でズィキルを指揮していたときとはずいぶん雰囲気の違い、ウィットに富んだ講話を行なっている。普段は弁護士として働くというシャイフは、いつも頭にタッケ（特に敬虔な男性が好む、礼拝時に被る帽子）を被り、厳格な口調で説教をする P 教団のシャイフとは、だいぶ様子が異なるようだ。煙草を吸いながら説教をする彼ならば、ズィキルの後に女性

たちがチャイを飲むことも許しているかもしれない。

このように彼女たちと一緒に修行に参加していると、タリーカが偏見や嘲笑の的となっているというトルコの現状を忘れてしまいそうになる。私の目には、彼女らの宗教実践は真摯なものとして映り、彼女たちの姿勢からは、ただ「神を想う気持ち」を感じることができた。一方、タリーカを蔑視する人々がいることも確かであり、彼らが特別に悪意をもった人たちであるかということ、私にはそうであるとも思えない。タリーカに参加する人も、タリーカを批判する人も、どちらも「ふつう」のトルコ人であり、社会的、個人的に何らかの力が加わったときに彼らは衝突を起こす。宗教をめぐる、さまざま議論が交錯する現代トルコ社会を理解するためにも、ときに「ふつう」の人々が対立する争点となるタリーカに今後も注目していきたい。

安定化の進む国境地帯

—ワンカー陣地からココ村へ—

佐々木 研*

「ドーナ山脈の山頂からは我々のエリアだ、君の安全は保障する。ただし、ドーナ山脈の

向こうから国軍と共に来れば君の安全は保障できない。」2004年7月にミャンマー連邦カ

* 東京大学大学院新領域創成科学研究科